■

絵画作品

《優しき薔薇》　KII Toshiomi
板にテンペラ　60×18cm　2001

作者の言葉

優しき薔薇

紀井利臣

薔薇の歴史は古く、世界中の古代文明において見ることができる。エジプトではロバとともに人間の心を救う純粋な献身を表すものとされていた。また、ギリシャではその後の西欧絵画史の源流にもなる赤い薔薇の話が著されている。「アフロディテ（ヴィーナス）に捧げられ、この女神が海から生まれたとき一番先に咲いたのが薔薇であり、傷ついたアドニスのもとへ急ぐアフロディテは、薔薇のとげで足を傷つけ、その血のために赤い薔薇が生まれた」と伝承されている。ボッティチェルリの描く「ヴィーナス誕生」に描かれた赤い薔薇はもっとも古く描かれた薔薇のひとつであった。豊穣や多産の祈りとして誕生したアフロディテはその薔薇の美しさとともに西欧絵画における欠かせないテーマ「美の女神」として多くの名画に登場することになる。

赤は生命の色であり激しく燃え上がる情熱や愛を表す色である。しかし、アドレナリンの分泌を促進させ交感神経を刺激し、精神は興奮状態に陥る。そして戦いに導くと同時に愛の渇望、強く激しい思慕の色でもある。優しさや甘える愛を表すピンクと異なり、失うこと、手に入らぬことに対する怒りを伴う愛を象徴する。

やがて赤い薔薇は老いて朽ち、浄化され殉教者となり、原初の無垢に宿る自然な喜びと変わる。蘇生を待つ優しき赤と変わり、取り戻せる情熱への穏やかな色になる。